



津屋崎人形

特集:べたべた ぬりぬり、津屋崎人形の旅

時代に順応する郷土玩具

津屋崎人形は玄界灘に面したのどかな港町・津屋崎の江戸時代から続く郷土玩具。
今回はそんな津屋崎人形を代々受け継ぐ「筑前津屋崎人形巧房」を訪ねた。

福

岡県の北部に位置する津屋崎は、町の西部から北部にかけては玄界灘に面する江戸時代から昭和初期頃まで行われていた塩田の積出港として栄えた町。当時は「津屋崎千軒」と呼ばれるほど家や商店がひしめき合う場所だった。現在は老舗の商店や酒蔵などのほかに、お洒落なカフェやショップなどが点在する県内でも知る人ぞ知るスポットとなっている。

そんな津屋崎で240年以上続く人形工房が「筑前津屋崎人形巧房」。土や石膏の型を使って作られる郷土玩具・津屋崎人形の工房で、現存する唯一の津屋崎人形専門の工房となる。今回話を伺ったのはこの工房の7代目となる原田誠さんと、息子で8代目となる翔平さんのお二人。彼らが代々受け継ぎ、今も守り続ける人形作りの技術や伝統には、二世紀以上愛される理由を垣間見ることができた。

親から子へ受け継がれる型と技術

津屋崎人形の型はその技術と共に受け継がれ、今も工房にその姿を残す。

「津屋崎人形の特徴は、2枚型を使って手押しで形成するため単純な形をしています。色は厚塗りで派手な色彩も特徴の一つです。昔はこの辺りでも粘土が採掘されたので、この工房でも人形だけでなく陶器なども作っていたみたいです」と話すのは原田誠さん。誠さんが人形職人になった理由は、先代である父の活男さんに「人形師」宿命だと教えられたからだそう。その教えの通り、人形師となった誠さんは即戦力としてこの工房で働き始めた。一方、翔平さんは一度公務員を経験した後、2016年に補助金を受けることができたのをきっかけに、販路拡大を図るため『津屋崎ビンス』やリーフレットの制作をしたんです。その時は別の仕事をしながら展示会の手伝いをしていたんですが、その時の反応を見て父の仕事が面白そうだと思っただけです。そこから父に師事をして今も人形師として勉強中です」と、翔平さんは人形師となつたきっかけを話してくれた。そんな翔平さんに誠さんは、自分の跡を

継ぐことを一度も勧めなかった。「私は半ば強制的にこの工房を継いだのですが、息子には同じ思いをさせまいと一度も勧めませんでした」。そんな息子想いの誠さんだが、師としての姿はどんな風なのだろうか。「もちろん厳しい面はあります。もし社会経験がなく父の元で修行をしていたら私も反発していたかもしれません。社会人への指摘や指導と考えると納得いくものばかりですね」と翔平さんは誠さんを冷静に評価。その言葉に父への信頼度の高さが感じられた。

津屋崎人形は土や石膏の「二枚型」の手押し製法で作られていて、工房には歴代の職人が生み出した型が1000点以上も保管されている。空気を抜くようにして2つの型に粘度を押し入れて合わせる整形。その後バリの部分を削り、乾燥させてから素焼きをする。素焼きした人形は顔料やアクリルを水・ニカワで溶かした絵具で着色。津屋崎人形は鮮やかな色合いも特長で、干支人形やお祝い事に飾られる人形も多い。また工程のほとんどが手作業で行われているため、一つずつ表情が違うのもポイント。



ユーモラスの造形も人形の魅力

古さを感じさせないカラーリングと共にその表情も魅力に。

津屋崎人形は240年を超える歴史の中で、デザインや素材などを時代に合わせ変えている。例えば古い型を使う人形には顔料を使用することが多いが、現代的なデザインのものには発色の良いアクリル絵具を使用。また型は当時のままでも着色の工程で現代的な色合いやデザインを加えることもある。もちろん形も少しずつ変化していて、中でもモマ笛は、作られた当初はフクロウそのままの形をしていたが、徐々に形が簡略化され今ではつぶらな瞳の顔だけのデザインとなった。どこかユーモラスなフォルムや鮮やかな色合いに加え、型による年代の違いも津屋崎人形を楽しむポイント。また、津屋崎人形は全て手作業で作られているため表情が一体一体異なり、それも魅力となっている。



津屋崎ピンズ / 各1,320円

直径2cm大のピンズで、無地のトップスやトートバッグのワンポイントとして重宝するアクセサリ。左上から時計回りに「鯉」「米」「菊」「青海波(せいがいは)」の5種が並ぶ。他にも「蛸蛤(とんぼ)」の「水玉」「縦縞」「市松」の全9種あり、さまざまなシーンに合わせて使いたい。



ごん太 / (大)4,400円、(中)2,970円

裸の男の子をモチーフにした「ごん太」は直立不動の姿勢でケシ坊主という姿が特徴で、明治の頃はおしゃぶり人形として利用していた。そのため当時は米粉とフノリで真っ白だったのだから、TVで紹介されて以来人気となり、近年ではデザイナーとのコラボアイテムも登場している。



袴(卯) / 1,650円

毎年作る干支シリーズの一つ。正装である袴(かみしも)を着ている高さ6センチうさぎは、その飛び跳ねる様子から飛躍の意味があると言われている。「みなさまにとって飛躍の年になりますように」という願いを込めて作られた縁起の良い人形。



モマ笛 / (大)1,650円、(中)1,430円、(小)1,100円

津屋崎ではフクロウのことを「モマ」と呼び、江戸時代から縁起物として地元の宮地嶽神社でモマ笛が授与されていた。吹くとフクロウのように「ホーホー」と音が鳴る玩具で、お年寄りが氣道を広げ食事の喉の通りを良くするために使っていたとも言われている。



泥めんこ 24個入り / 7,150円

一つ2cm程度のお面の形をした郷土玩具。「津屋崎めんこ」とも呼ばれ、当時は指で弾いて遊んでいたのだそう(当時はもっと硬い素材でできていたとも言われている)。表情豊かなお面と共に縁起物やカラフルな果物や花がセットになっている。玄関やリビングの一角に飾っておきたい一品だ。

※価格は全て税込み価格

今回の旅のメモ。

今回の旅で訪れたのはこちらです。

profile

原田 翔平 / 筑前津屋崎人形巧房 八代目

父で筑前津屋崎人形巧房七代目の原田誠さんに師事し、同工房の八代目として人形作りに従事する。人形師を始める前は公務員として働いていたが、とある展示会で父の作る人形がセレクトショップや有名企業から注目を浴びていることを目の当たりにしたのだそう。その時に津屋崎人形の可能性を感じ、自身も人形師となることを決意した。現在は人形作りのほか、津屋崎人形の歴史や人形作りの技術の高さを発信するためにSNSの更新やワークショップの開講にも力を入れている。先祖代々受け継がれる津屋崎人形の歴史と技術をリスペクトする八代目の新たな挑戦に期待が高まる。



筑前津屋崎人形巧房

福岡県福津市津屋崎3-14-3

TEL.0940-52-0419 <http://tsuyazaki-ningyo.jp>

access

筑前津屋崎人形巧房
まで

[公共交通機関で]・・・福岡空港から地下鉄空港線福岡空港駅へ。地下鉄に乗りし、博多駅を下車。
JR博多駅から鹿児島本線で福岡駅へ。福岡駅前バス停から西鉄バス津屋崎橋行[宮司団地]行きに乗り換え、
津屋崎浜バス停を下車。バス停から北西へ徒歩で約4分
[車で]・・・・・・・・福岡空港から県道45号/県道574号、ユニバ通り、県道91号を経由し、九州縦貫自動車道に入る。
古賀ICを出て、県道35号を北に進む。海岸通り/国道495号に入り北へ進み、天神町交差点を左折。
福岡空港から約40分

more information

筑前津屋崎人形巧房に関わるあれこれ

web

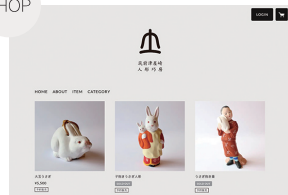


津屋崎人形巧房 かわらばん

翔平さんが更新する津屋崎人形の情報サイト。ごん太やモマ笛などの津屋崎人形の歴史や起源はもちろん、伝統工芸に関する自身の考えやオススメの著書などもブログ形式で掲載されている。またイベントスケジュールなども掲載。

<https://tsuyazaki-ningyo.club>

SHOP



筑前津屋崎人形巧房 公式通販サイト

津屋崎人形巧房の作品が購入できるオンラインショップ。津屋崎ピンズや2023年の干支・ウサギの各種アイテムなどもラインナップ。また、モマ笛の絵付け体験セットも販売中。工房での絵付け体験の予約もこのサイトから受付している。

<https://tsuyazaki-ningyo.stores.jp>

モマ笛絵付け体験予約
<https://coubic.com/tsuyazaki-ningyo/779919>

SHOP



山響屋

店主・山響ART氏が、自らの足で生産者のもとを訪れ、顔を合わせて入手した九州各地の民芸品と郷土玩具が並ぶ郷土玩具店。その土地の風土や生活習慣から生まれたさまざまな民芸品や郷土玩具との出会いを楽しむことができる。

福岡市中央区今泉2丁目1-55やまさコーポ101
092-753-9402
[営] 11:00～20:00 [休] 木曜
<http://yamabikoya.info>



作業中はお互いそれぞれのラジオ聴いているため、ほとんど会話がなかったとか。
しかしそれは、父が息子を信頼し、息子が父を尊敬している証なのかもしれない。

祖先が残した技術を伝えるために

津屋崎人形が手作業で作られていることはあまり知られていない。
だからこそ、その技術を多くの人に知らせたいと翔平さんは話す。

津屋崎人形はほぼ全ての工程が手作業で行われる。着色はもちろん、人形を象る際も手押しによるもの。
「私はまだその域には達していないのですが、父が型に手押しするとほとんど粘土がはみでないんです。こういったちよつとした技術の中に、父の50年間かけて培った職人技を感じます。なかなか言語化することは難しいのですが、歴代の人形師の技術の結晶によって津屋崎人形が作られていることを、より多くの人に伝えたいと思います」と翔平さんは話す。工房でモマ笛や干支人形の絵付けのワークショップを実施しているのも津屋崎人形の技術をより多くの人に体験してもらうため。「立体に色を塗る機会はありませんが、作品ができるまでとまじたいとおっしゃいますね」と誠さん。店舗はもちろん、各地で開催される展示会やワークショップなどを通じて、ぜひ福岡を代表する郷土玩具に触れて欲しい。